

6-1 大きなジレンマ！発注者指示とその妥当性に対する疑問

1. 立場と仕事

入社約 20 年の中堅技術者。コンサルタント部門で民間大規模土木施設の設計や施工監理を数多く手がける。民間大規模プロジェクトの施工監理業務を受注し、現場対応のリーダーとして、発注者を代行し、日常の施工監理から、技術的課題に対応する変更設計の検討、変更設計に伴う変更契約に関する発注図書作成を担当することが予定されていた。

2. 遭遇した事態

自身が実施設計を担当したプロジェクトの設計思想を工事に反映するという前提で施工監理を受注した。しかし、発注者の組織体制が変わり、発注者側の責任者も大幅に顔ぶれが交代し工事の運営方法が大きく変わる事となった。施工監理業務スコープも発注者→施工監理業者→工事会社という流れから直に発注者→工事会社という流れに変わった。

体制変更により工事運営プロセスが変わり、変更設計の検討業務は対象外となり、変更設計に関連する変更契約関連図書作成が主要業務として残った。変更契約の都度、金額と変更項目のみが発注者から指示があり、変更の思想が不明確なため変更契約図書作成に苦慮することとなった。変更設計は主に発注者が工事会社に検討を命じ、工事会社からの提案をベースとしたものであった。

土木工事では予期せぬことが起きるため、設計監理をする立場から工事会社からの提案（比較案）に対して議論を行った。工事会社からの変更設計の提案は優れたものも多いが、当然かもしれないが工事会社のリスクを下げ、経済性の点においては疑問を感じるものも散見され、その妥当性について常に疑問を感じていた。しかしながら、工事会社提案をベースとした内容に基づく変更契約の工事費試算を命じられることとなり、妥当性に疑問を持ちつつ発注者指示に対応しなければならないジレンマの中で、技術者としてどのように業務に対応するかが課題となった。

3. 対応内容とその結果

現場で課題が生じた際には、自分ならこう対処するという考えは常に頭に置いていた。自分なりの変更設計やその概算工事費については、適宜自主的に検討を行い、基本的に大部分は受け入れられなかったが、発注者に対し提案を行った。

結果として自分が考える以上に工事費は増高した。工事費の増高等については自社の上層部にも情報が伝わり、状況についてヒアリングを受け、適宜説明を行った。会社上層部も問題点を認識し当方の対応については理解してもらった。

工事は竣工し、建設に関われたという満足感があったが、自分では納得の行かない工事マネジメントの中にいたという不完全燃焼状態の感じも残った。自分の疑問に賛同者も多く、会社や工事関係者からも支援をもらったが、最終的には、押し切られる結果となった。

自分の主張は 100%正しいとは思わないが、その構造物に求める品質のレベルは発注者次第で大きく変化する。最終的に得られる品質・コストの最適点を見出す洞察力の重要性について考えるようになった。